

『史料で読む江戸の園芸文化』刊行にあたって

明治の終わりごろ、大久保駅近傍の丘の上からは、まだ東京の町々が一望できました。ちょうど季節が五月にさしかかり、躑躅が花盛りの頃になると、ここからみる風景は、花の色以外は新緑の緑であったと、明治の詩人、大町桂月は語っています。その美しさは、江戸時代に育まれた江戸の園芸文化の名残がまだこの地に息づいていた貴重な証言といえるでしょう。

大都市にして緑溢れる園芸都市——江戸。そんな都市の特質を明らかにするため、江戸東京博物館では、平成二十五年度に特別展「花開く 江戸の園芸」をはじめとして、シンポジウム「江戸の園芸—環境と観光—」の開催、論文集『江戸の園芸文化』（調査報告書第二十九集）の刊行など江戸の園芸文化に関する成果を積み重ねてきました。そして今回新たに調査報告書第三十一集として、『史料で読む 江戸の園芸文化』を刊行することとなりました。

この史料集では「花開く 江戸の園芸文化」の展覧会で展示することができなかった古文書と、その後の調査で新たに見いだした興味深い史料を加え、新たに全体を再構成しました。その結果二四五点の園芸史料を掲載することになりました。ここでは、外国人から見た江戸の園芸、自然の樹木を愛した人々、将軍が造った花名所や庶民がつくった花屋敷、園芸文化をより洗練していった園芸市場・栽培技術・出版メディア、そして園芸の世界にも起きた明治維新による大きな変化、などの観点を重視しました。またできるだけ多くの方に江戸の園芸文化のあるがままの姿を読み取っていただけるように、基本的な史料を中心に選択し、表記もできるだけ読みやすくなるよう努めました。これらの史料を通じて、江戸時代の人々が育んだ独自の園芸文化の素晴らしさに思いを馳せていただければ幸いです。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、多大な御理解・御協力を頂きました方々に、心より御礼申し上げます。

平成二十八年三月

東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室